NY エッセイ 80

中瀬有紀

デザイナーかアーティストか



ワールドトレードセンターと金融街

夏の休暇と題してドイツから知り合い夫婦がニューヨークに遊びに来ました。グラフィック・デザイナーの彼と公務員の彼女を囲んでステーキハウスで食事をしていたときのことです。「デザイナーはアーティストか」という難題がどこからともなく話題に上がりました。同席していたアメリカ人照明仲間の討論魂に火がつき、とても興味深い意見交換となりましたが、結局ワインのボトルを何本開けても結論が出ませんでした。

ドイツチームの主張は、もっぱらデザイナーとアーティストは別物だということです。彼女がはじめに「ドイツで言うアーティストはアートを勉強した人で、ピカソなどの有名な画家たちのこと」と結論づけました。すぐさまアメリカチームから「では美大を卒業して間もない無名美術制作者はアーティストではないのか」という質問が飛び、言葉を詰まらせる彼女の隣で彼が「デザイナーはカスタマーのコンセプトに合う製品を形成するための構成者だ」と続けます。「デザインは作品の顧客と使用者がいてこその制作である点でアートと違う」という主張に一同は一瞬納得しつつも、アメリカチームからさらなる疑問が飛び出します。顧客のあるアートも顧客のないデザインもあり得るし、より多くの利益を得る作品を目標とするアーティストもボランティアで作品制作に参加するデザイナーも存在するため、両者の意見は平行線をたどる一方です。

この終わりのない討論が証明しているとおり、アメリカでは「デザイナー」と「アーティスト」という2つの言葉が混同しているのが現状と見受けられます。たとえば、照明デザインを学ぶ大学院の学部は「デザイン学部」と名付けられていることが多いですが、取得できる学位はM.F.A.（マスター・オブ・ファインアーツ）という「アート」と名付けられた修士であり、M.F.A.の留学生が取得する就労ビザはO-1（アーティスト・ビザ）が主流です。また、舞台制作のクレジットで照明デザイナー含む制作者たちを「アーティスト」とタイトルづける場合もあります。したがって、照明デザイナーがアーティストであるかは個人の自覚に頼らざるを得ない状況です。

この討論会で唯一日本人の私は、「照明デザイナーという役割はアーティスト活動ではない」と、発言しました。デザイナーとアーティストに共通するのは、どちらも作品の課題解決係だという点ですが、その課題の出どころがデザインとアートの境界線であり、デザインの課題は他者にありアートの課題は自己にあります。舞台もテレビもイベントも、照明を使って解決すべき問題が他者（戯曲・楽譜・音楽・振付・芝居・出演者・展示物・演出など）から課されるという理由で、それらの照明プランを設計する人は「デザイナー」だと言えます。

そもそもドイツ語と英語と日本語が表現する「デザイン」と「アート」という言葉が微妙に違う意味をもつかもしれないので、異文化間の発言を双方の言語を習得せずに正確に理解し合うことは不可能に近いでしょう。しかし、何が正しいか結論を見出すより、言葉（とワイン）を尽くしてまで互いの考える「正しいこと」の違いを乗り越えようとする皆の姿勢そのものが素晴らしいと感じました。デザイナーがどのように自身を認識しようと、それぞれに合う解釈を尊重しあえるチームの一員として仕事するのが一番良いし、個々の考えに違いがあってこそ面白い世の中だと思います。人種のるつぼ、ニューヨークならではの一夜でした。